
レンタルID

みくも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
レンタルID

【Nコード】
N6029J

【作者名】
みくも

【あらすじ】
特定の恋人を作らない「僕」はある夜「彼女」に出会った。母親を憎む彼女に、僕は「殺してあげようか？」と訊く。

1 ボク。(前書き)

殺人や自殺に触れる部分があります。苦手な方はご注意ください。
殺人や自殺を肯定するものではありません。

1 ボク。

「どうして僕を選んだの？」

興味本位の質問だった。

いや、興味さえなかったかも知れない。手招きするのも億劫で、傍においてと言う代りに訊いた気がする。

すると彼女は長い髪をサラリと揺らし、少しだけ頭を傾けて答えた。

「私を、知らなかったから」

僕はその答えが酷く気に気に入り、彼女とだけは何度も会った。

適当に選んだラブホテルの部屋は、甘ったるい色付きの照明。黒っぽい髪と眼の他は、全部がピンクに染まって見える。

色のよく解らないシーツの上に、彼女の腕で押し倒された。そこから見上げる格好で、甘そうな肌に軽く噛み付く。

本当に甘い訳はないのに、少しひやりとした肌は、舌でなぞると熱っぽく頭の芯を痺れさせた。

名前も知らない、二度と会わない相手と寝るのが好きだった。

決まった女と会うのは苦手だ。最初の内はお互い遊びと物分りのいい顔をするくせに、いつの間にか特定の恋人になりたがるから。

だから彼女だけは特別で、でも実は、感じていたのだ。僕よりずっと彼女の方が、特別な関係を嫌っていると。

気が向いたらメールして。キスして、話して、抱き合って。ふざけて僕の服を着せてみたり、口先だけで愛を語った。

不思議な事に、舌を絡めてキスした直後に愛してると言った所で、本気じゃないと僕達には解ってた。これほどの居心地のよさは、他にない。

だから彼女について知っていたのは、地元の間人じゃないって事。多分偽名のレイコって名前。それから写真を、極端に嫌うって事だけだった。

いつも通り無責任に抱き合って、次の約束もなく別れた夜。それを最後に彼女は消えた。

しばらくして、理由を知る。有名人の私生活を覗く週刊誌に、僕等二人が載ったのだ。

自分のペットや小動物のゲージを抱えながら、待合室で暇を持て余したおばちゃん達が週刊誌の写真を指す。「綺麗な子ねえ。先生、こんな子どう？」等と言いながら、診察室の中にまで話し掛ける。

犬や猫の鳴き声に囲まれた獣医師は、苦笑いだ。三十過ぎて独身だと、こうやってからかわれてしまう。

そこには見開きで大きく、男とキスする彼女の写真。自分だからそう思えるのか、目は黒く塗られていても紛れもなくこれは僕だ。腕の中で丸まった猫の顎を掻きながら、よく知ったおばちゃん達の顔を眺める。実はこの相手の男は僕なんです。なんて言ったら、一体どんな顔をするんだろう。

もちろん、僕は有名人なんかじゃない。記事によると、どうやら彼女はモデルらしい。そう言う事に疎いから、知らないけど。

だがこんなに大きく紙面を割かれた本当の理由は、彼女の母親の様だった。

地方の歓楽街で適当な男と遊ぶモデルは、実は有名女優の一人娘。と、記事には面白そうに書かれていた。

この記事を見て初めて、僕は彼女の名前を知った。モデルか、なるほど。綺麗なはずだ。でも私生活まで晒されて、大変そう。

今考えれば呑気なものだが、この時点で僕が考えたのはこの程度。他人事だ。

本当に困るのは、翌週の雑誌が発売されてから。

僕等が載った最初の号には、彼女と、彼女の母親の事しか載っていないかった。だが次の号では相手の男、つまり僕について触れていたのだ。

仕事を休んでいた僕は、携帯電話に掛かった通話を自宅で受けた。その音声は、何だかザラザラと耳を撫でる。

『ごめんね』

最初の一言を言ったきり、電話の相手は黙り込む。

僕の記事を書せた週刊誌が発売されて、数日。電話の彼女は何だか無口だ。

考えてみれば連絡はいつもメールで、電話で話すのは初めてだ。

少し話すのも新鮮かな、なんて思う。

「レイコ」

『え？』

「レイコって、お母さんの名前なんだね」

偽名に母親の名前なんて、歪んでる。ふざけたつもりでそう言う
と、意外にも彼女は否定しようとしなかった

『そうかも知れないわ』

傷付いた様に消えそうな声が、ザラリと僕の好奇心に触れる。

「嫌いな？ お母さんが」

『そうよ。大嫌い』

「へえ」

どれくらい？

憎むくらい？

いなければいいと、願うくらい？

次々に重ねて問うと、何かを持て余すかのような空白の後、彼女は
肯定で返した。

有名女優の娘と言うのは、想像以上に苦労が多いものらしい。

子供の頃から母親のアクセサリーの様に人目に晒され、着る服や
友達も自分では選ばせて貰えなかった。

出会う人々は皆が皆、自分ではなくその後ろの母親を見る。彼女
がどんな人間か、ではなく、彼女が誰の娘か。その事だけが重要だ
とでも言う様に。

成長して、母親と同じ芸能事務所からモデルとして仕事を始めた。
すると、それはもつと顕著になった。女優の娘。で、モデル。

モデル。で、母親は女優。そう変わる日を待っていたのに。

『今も私はあの人の人形よ』

「苦しい？」

『ええ』

「ならどうして、一緒にいるの」

僕には理解できなかった。

自分を苦しめるだけの人間なら、捨ててしまえばいいのに。

一瞬、沈黙。それから。

『……中学の彼女も、そうやって捨てたの？』

これはきつと、週刊誌の情報だろう。

ほんの少しだけ驚いたが、「そうだよ」と答えるのには余り苦労しなかった。

僕は中学三年で転校し、家族と離れて暮し始めた。高校も大学も、遠くを選んで進学した。

以来今も、生まれ育ったあの場所には戻れずにいる。戻りたいかどうか、解らない。

中三で転校する直前に、僕は当時付き合っていた彼女を死なせたから。

正しく言おう。

僕が転校する事になったのは、あの子が死んだせいだ。

あの子が死んだのは、僕が一方的に別れたせいだ。

僕のせいだと、遺書には理由が書いてあった。別れたがったのは事実だから、否定はしなかった。

ただ、彼女が何を考えていたかは知らない。自分に取って唯一の事実を言い続け、そんな僕を周囲は責めた。

今回みたいな写真はないが、当時は週刊誌にも載ったはずだ。

この過去が、今回の事で掘り返された。

今、周りにいる人達は誰も知らなかった事。だけど週刊誌の記事は僕の住むおおまかな地域と、職業を暴露してしまっていた。僕を知っていれば、充分に特定できる。

仕事を休んでいるのは、そのためだ。

『何で別れたかったの？ あっちは死んじゃうくらい、あなたの事が好きだったのに』

「知らない。死んだら、僕が感激するとも思っただのかな。だとしたら、勘違いもいい所だけど」

『酷い人ね』

「どっちが。欲しくもない好意を押し付けられたって、迷惑なだけだよ」

『そうかしら……』

「違う？」

僕の問いに、神経を凝らして考え込む姿が見える様だ。

『きつと、そうね』

長い沈黙の後で、考える事を放棄したみたいに彼女が言った。納得は、して貰えなかったみたいだけど。

だからか、どうか。

何であんな事を言っただろうと、自分でも不思議で仕方がない。「殺してあげようか」

『何？』

「今、お母さんだったらどうかって、考えてたでしょ」

僕とあの子について考えるふりをして、彼女はきつと自分と母親に置き換えて考えていたと思う。

「ねえ。大嫌いなお母さんが死んだら、君はどう思う？」

彼女は答えず、電話を切った。

どうして、僕はこんな事を言っただろう。

ついこの間まで名前も知らなかった女のために、そんな事をしてやるはずなんかないのに。

2 レイコ。

一カ月ほど経った頃、僕は彼女の母親に呼ばれた。

東京まで足を運び、指定された住所を訪ねる。驚いた事に、そこは彼女達親子の自宅だった。

高い壁と、大きな門に守られた家。その前に立ってやっと、後悔めいたものが胸に湧く。

来るべきではなかった。そう思ったのに。

僕は上着のポケットから片方だけ手を出して、インターフォンを押した。客の到着を住人に知らせる、呼び鈴の電子音。

どこか遠くにそれを聞きながら、ポケットに残した指先でプラスチックの筒を撫でた。ずっと上着の中にあっただせいで、指先で触れても体温と同じに温かった。

少しすると応答があり、門の隣にドアがあるからそこから入れと指示を受ける。

本物の「レイコ」だ。

すつきりと豪華に、クリーム色の大理石で統一された玄関。そこで僕を迎える彼女の母親は、さすがに綺麗な人だった。

「お上がりになって」

「……どうも」

他には誰もいない。これは呼び出しを受けた時、僕が頼んだ。よってたかつて責められるなんて、冗談じゃないと。

しかし正直、本当に誰も同席させないとは驚きだ。

絨毯の敷き詰められたリビングに通され、勧められるままソファに座る。「レイコ」は少し遅れ、用意してあったらしいティーセツトをトレイに載せて運んで来た。

そしてテーブルを間に置いて、膝の向きが僕と直角になる様な形で斜め前の椅子に座った。口を開かず、紅茶を準備する。その女性の横顔を、そっと見た。

彼女の母親なのだから、五十前後なのだと思う。だとしたら、この人は僕の知っているおばちゃん達とは違う生き物なのかも知れない。

そう思いたくなるほど美しく、そしてやはり彼女に似ていた。

「どうぞ」

「すみません」

出された紅茶に眼を落とし、しかし手を付けずに傍の女性へ視線を移す。

「お話と言っのは？」

女優らしく、と言うべきか。「レイコ」はワンピースのゆったりした袖をたくし上げ、演じる様に腕を組んだ。

「もう、娘に関わらないで頂きたいの」

「なんだ。そんな話ですか」

「大事な話だわ」

むっとして、眉を歪める。まるで、それが正解のポーズみたいに。「そうですね。失礼しました。でもそれなら、電話で済んだでしょう」

「受け取って頂戴」

「それは？」

「五百万入っています。足りないなんて、仰るのかしら？」

パンかケーキでも入っていきそうな紙袋を、テーブルの上に置いて言う。僕は堪らず、吹き出して笑った。女優は一層、不機嫌な顔を作る。

「ふざけてらっしゃるの？」

「すみません。何だか、ドラマみたいで」

「お金が必要でしょ。ご迷惑をお掛けした様だし」

「まあ確かに、仕事は辞めてくれと言われていますね」

この事を知っていたのだと、やっと気付く。それでわざわざ、金を渡すために呼んだのだ。

仕事を失うなんて、面倒な事になったとは思うが、仕方がないと

も諦めている。僕は、信用をなくしたのだから。

「大変なこと。これからどうなさるの」

「さあ……。決めていませんが、職場も変えて、どこかに引っ越すでしょうね。誰も僕を知らない場所へ」

中学の頃、そうした様に。

今までだつて僕は僕じゃなく、誰でもない誰かみたいに振舞つて来たのだ。

——誰か。

誰かつて、誰だ？

考える内に、僕は気付いた。

そうだ。僕は、——僕も、演じて来た。「新しい自分」になつたんじゃない。「自分以外の誰か」を借りて、嘘で生きて来ただけだ。なるほど。と、納得する。

女も友人も、僕にはいない。関わりたくないから。そのはずだ。関われる訳がない。本当の自分にさえ、もう関わっていないのだから。

口元に当てた手の平に、薄く汗が滲んでいる。

僕は、どんな人間だつただろう。

狂った様に嘲笑の声を上げ、滅茶苦茶になるまで自分を痛め付けたい気分になつた。

「それが宜しいわ」

はつきりとした発声に耳を打たれて、ずっと頭が冷やされる。何の話をしていたのかと考えを巡らせ、仕事の事だつたと思い出す。

どう考えても興味なんてないだろうに、美しい横顔は冷たげに頷いていた。

それにしても、と思う。

五百万とは結構な大金だ。相場はよく知らないが、いわゆる手切れ金としてこれほどの金額を用意するのか。

意外な気がして、口を滑らす様に訊いてしまった。

「誰のためのお金です？」

「え？」

「娘さんのため？ それとも、あなたの？」

「失礼な人ね。私は、娘に傷を付けたくないだけだわ」

「母親らしいセリフですね」

思わず笑うと、斜め前に座った女性はふと表情を曇らせた。戸惑う様なそれを見て、初めて素顔の表情を見た気がした。

だとしたら、きっとどうして僕が笑うのか、解ってはいないだろう。

その鈍感さに、苛々する。

「娘さんを傷付けるのは、あなたですよ」

「……何ですって？」

「僕じゃありません。娘さんを苦しめるのは、あなただ。きっとあなたがいなければ、あの人はもつと楽になれるんでしょうね」

「あなた、頭がおかしいんじゃないやありません？ 育てたのは私だわ。

私がいないと、娘は何もできないもの。私が全部与えたの。私が……私は、娘のために生きて来たわ！」

そののどこを責めると言うの。

艶かしい唇をきゅつと結んで、「レイコ」はきつく僕を睨んだ。

「参ったな」

肩を竦める様に、上着のポケットに両手を納める。部屋に通されてからも、僕は上着を脱がずにいたのだ。

「だから彼女も、あなたのために生きるべきだと？」

「不愉快だわ。お金を持って、帰って頂戴！」

腹立たしげにわめいて、椅子から立ち上がる。目の前の女性とタイミングを合せ、僕も立ち上がってその腕を掴んだ。

何が起ったのか、解らないみたいだった。掴まれた腕に眼をやつて、それからはつとしてこちらを見る。

その時にはもう、僕はポケットの中に忍ばせていた物を取り出して、半透明のキャップ部分を口に銜えていた。

手早くワンピースの袖を捲くり上げ、白い腕を直接掴む。逃れよ

うと身を擦って抵抗するが、女の力で男を振りほどくのは無理だろう。

「な……何をするの！」

噛んだキャップから本体を抜き出し、白い腕に針を当てた。

「あの記事を読んだなら、ご存知ですよ。獣医なんです、僕」

半透明の白いキャップが、僕の口から離れて落ちる。音もなく絨毯の上に着地して、ストッキングに包まれた爪先の傍に転がった。

「それが、何なの」

「薬が、簡単に手に入るって事です」

目盛りが入った、筒状のプラスチック。僕の体温で温くなった注射器は、薬液で満たしてある。

人間相手は慣れてない。血管らしき場所を探して、針を刺すと一気に薬液を押し込んだ。引き攣れた様な悲鳴が、「レイコ」の喉から微かに漏れる。

「筋弛緩剤です。聞いた事くらい、ありますよね。あなたはサスペンシドラマにも出る様だし」

言い訳みたいに説明しながら、だらりと力を失った身体をソファに寝かせる。ふと気になって、ワンピースの裾を整えた。

「すいません。苦しいでしょう？ この薬は自発呼吸を止めるから、眼には見えないが、鼻と口をぴったりと塞がれているのに近い。自分の意思では肺の筋肉を動かせず、空気を体内に取り込めないのだ。」

窒息の苦しさに、整った眼の端から涙が滲む。そのまま雫が盛り上がり、流れ落ちた瞬間に僕は堪らず顔を背けた。

仕上げるために、カードを選ぶ。

銀行や、クレジットカードは却下。なくなっても、すぐには気付かないヤツがいい。その方が自然だ。レンタルショップのカードなんて、どうだろう。

財布から抜き出したそれを、自分が座っていたソファの下に滑り込ませた。

キャップを拾って注射器に被せ、ポケットに納める。それから手を引っ込めた袖口で、ドアノブや柱の指紋を拭き取りながら玄関に戻った。

全てを終えて、高い壁と大きな門を来た時と同じ様にして見上げる。

今頃はもう、「レイコ」は死んでいるだろうか。本当は、死を確認するまで傍にいたべきだった。

でも、できない。

彼女に似た顔が死んで行くのは、とても見ていられなかった。

3 カノジヨ。

それから、ずっと考えている。

中学の頃に死んでしまった、あの子の事を。

何も知らない子供だった。なのにどうして、死ぬ事なんか選んだの。

あの子は何を見ていたんだ。

今までこんな事はなかったのに、やはり僕は変わってしまったのだろうか。人を求めて、人を殺して。

丸一日が経った。

そろそろ、警察が僕を訪ねてもいい頃だ。

自宅のマンションで、ダンボール箱に囲まれて待つ。

箱の中には、部屋中の物が全て詰め込まれていた。過去を暴かれ、職も失い掛けている。引越しを考えていても、おかしくない状況だ。

警察はきつと、この箱の山を気にも留めないだろう。実際は、身辺整理のつもりだったけど。

がらんとした部屋の隅で、ぼんやりと窓の外を眺めて過ごす。

やたらと空が青くて、いい天気だ。

ペットボトルのお茶を片手に、まるで呑気な休日みたいだと思う。

煙草でも、覚えて置けばよかった。少しは格好が付いたのに。それで雨でも降っていたら、最高に気分が出る。

床に下した尻のポケットで、携帯電話が着信を告げた。

『ママ、死んじゃったわ』

聞き慣れた、彼女の声。僕は何とか平静を装い、気のなさそうな返事をする。

「そう」

『驚かないのね』

「驚いてるよ」

どうして僕に、電話なんかしてくるんだろう。人が殺されたら、警察に任せるものじゃないのか。

頼んだからと言って、彼女の母親が僕と会う事を本当に誰も知らないはずはない。マネージャーだっているだろうし、お金を用意するには誰かが理由を聞いたかも知れない。

全ては僕に繋がるはずだ。

「どうして僕に、そんな事を教えるの」

『あなたが殺したのか、確かめたくて』

「殺してないよ」

『本当に？ 殺してくれるって言ったのに』

それとも、警察にでも頼まれたのだろうか。彼女との電話なら、僕が口を滑らせると。

それはありそうな気がして、慎重になるべきだと自分を戒める。

「信じたの？」

『……信じたわ』

秘密めいた囁きで、彼女は言った。

「駄目だよ。信じちゃ」

『何で？』

「だって、僕等には嘘しかないじゃない」

『そうかしら』

「そうだよ」

認めるつもりはなかった。

完全犯罪を目論んで、失敗してしまったマヌケな犯人。多分それが、似合っている。

きっと僕は、どこか壊れているんだろう。自分の名前が刻まれたカードを、ソファの下に滑り込ませた時にそう思った。

彼女の母親を殺す事で、僕は彼女の一生に残りたいと願っていたから。

だから初めて、あの子の気持ちを解ると思った。解りたいと思った。僕のために、死んだあの子を。

どうして僕を選んだのかは、解らない。でもあの子は、死ぬ事で僕の人生に残ろうとしたんじゃないかとそう思う。

まだ子供だったのに。まだ何も知らなかったのに。自分達だけは、もう充分に大人みたいだって思ってたあの頃。

今になってやっと僕に解った事が、あの子にはとっくに見えていたのか。

『ねえ、どうしたの？』

『ごめん。何？』

『聞いてなかったのね』

『ごめん』

『だから、大変だったのよ。パパに連絡して、来てくれるまでずっと人工呼吸したんだから』

『パパ？』

そう言えば彼女には離婚した父親がいて、記事でチラッと読んだ気がする。

『パパは病院経営してるの。だから、内緒で治療して貰えたのよ』

『……ああ、そう』

内緒で？

相槌を打ちながら、何かが引つ掛った。どうしても、秘密にする事があるんだろう。被害者なのだ。堂々としていればいい。

それよりも死んでしまったら、内緒も何もないだろう。

『そう言えばテレビとかで何も言わないけど、警察が報道規制してるのかな』

『報道規制？ そんなのしてないわ』

『だって、大騒ぎじゃないの？ 女優が殺されたりしたら』

バチバチと眼を瞬く音が聞こえて来そうな、きょとんとした沈黙があった。

そして、むくれた声に責められる。

『もっつ、どこから聞いてなかったの？』

『知らないよ。聞いてなかったんだから』

怒り出すかと思ったが、それもそうね、と彼女は笑う。そしてさ
らりと。

『だから、私もいたのよ。お金を匂わせたらどんな男が解るから、
見てなさいって言われて。隣の部屋にいたの』

「……それ、何の話？」

『あなたとママが、家で会った日の話よ』

どう、解った？ と、勝ち誇る様に言われて、僕は目眩を覚えた。
「待つて。じゃあ、見てたつて事？ 僕とお母さんが、話してるの
を？」

『そうよ』

殺すのさえ。

「止めずに？」

『だってあなた、手際いいんだもの』

止める時間なんか、なかったじゃない。機嫌を損ねた様に言う彼
女を、僕は理解できなかった。

「お母さんを殺した男と普通に話すなんて、どうかと思うよ」

『いいじゃない。私、ママよりあなたの方が好きなもの』

「あのねえ！」

そう言う問題じゃないと思うよと、説教めいた事を言おうとして、
言葉を切る。玄関のチャイムが鳴ったからだ。

ギクリと、心臓が跳ねた。

覚悟していたつもりでも、やっぱり少し緊張が走る。

「ごめん、切るよ。警察が来たみたいだ」

『違うわよ』

いやにきつぱりと断言する。僕は玄関に向いながら、首を傾げた。
「どうして？」

カタン、と軽い音がして、郵便受けに何かが落ちた。確かめると、
僕がああ場に残して来たレンタルショップの会員カードだ。

『だってママ、死んでないもの』

玄関のドアを開く。

「ママが警察に言うつて騒いだから、またマスコミが大喜びねって言っただの。そうしたら、黙って口きいてくれなくなっちゃった」

僕は携帯の通話を切った。目の前には、足元に大きなトランクを一つだけ置いて、電話片手に立つ彼女。

「やっぱり君、どうかと思うよ」

呆れた様に僕が言うつと、彼女は意地悪そうな笑みを浮かべる。

「ええ、あなたもね」

眩しいほどの太陽の下で、笑う彼女は初めて会う人みたいだった。輝く様に綺麗な人。

彼女は僕にトランクを任せると、さつさと靴を脱いで部屋の中へと上り込んだ。

どうやら彼女の一生に、僕は残りそこねたらしい。

でも代りに、僕の人生には彼女が飛び込んできたのかも知れない。重たいトランクを運びながら、僕はそんな事を思った。

(レンタルID了)

Copyright (C) 2010 mikumo/1979.

All rights reserved.

3 カノジヨ。(後書き)

最後まで読んで頂きまして、有難うございました。
ご意見などを頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6029j/>

レンタルID

2010年10月8日14時34分発行